

定名詞句の「現場指示的用法」について

東郷 雄二

0. はじめに

定名詞句 definite noun phrase という用語は、一般に不定名詞句 indefinite noun phrase と対置され、指示的に定である名詞句すべてを総称する用語として用いられることがある。この場合、定名詞句には the boy のように定冠詞つき名詞句以外にも、指示的に定である固有名詞 (ex. France) ・指示形容詞句 (ex. this book) ・所有形容詞句 (ex. my car) など含まれることになるが、本稿では定冠詞つきの名詞句のみを定名詞句と呼ぶことにする。よって本稿での考察の対象になるのは、the boy のように定冠詞つき名詞句のみである。

定名詞句は、その指示の多様性によって、現在までさまざまに問題にされてきた。定名詞句の指示がどのようなメカニズムによって決定されるかという問題は、伝統文法ではしばしば冠詞の用法として提起されている。それによると、定冠詞は弱化した指示詞 demonstrative であり、それ自身で指示を決定する力がなく、ただ指示対象が聞き手にとって同定可能である identifiable ということだけを示し、その指示対象の決定に必要な情報は、どこか別の場所に求めねばならないとされている。代表的なものとして、Halliday & Hasan (1976) の見解を引いておこう⁽¹⁾。

(1) “The definite article has no content. It merely indicates that the item in question is specific and identifiable; that somewhere the information necessary for identifying it is recoverable.” (p.71)

では定名詞句の指示対象の決定に必要な情報は、どこに求めればよいのだろうか。Halliday & Hasan (1976) は次のように続けている。

(2) “Where is this information to be sought? Again, either in the situation or in the text. The reference is either exophoric or endophoric.” (Ibid.)

定冠詞の指示は、「外界照応的」 exophoric か「文脈照応的」 endophoric であるとされる。つまり、定名詞句の指示の決定に必要な情報は、言語外的な発話の現場か、あるいは言語内的文脈にあるということである。本稿ではHalliday & Hasan が exophoric と呼ぶ用法に焦点を当てて、それを「現場指示的用法」と呼ぶことにする。

Halliday & Hasan によれば、現場指示的用法には2種類あるとされている。第一は the N によって特定の個体が指示されていて、その個体が特定の状況下で同定可能な場合である。例えば Don't go ; *the train's* coming. では、the train は “the train we're both expecting” と解釈され、一意的に同定される。mind *the step*, pass me *the towel*, *the children* are enjoying themselves, *the snow's* too deep, *the journey's* nearly over など同様である。第二は発話の状況いかんにかかわらず、言語外的知識により指示対象が同定できる場合である。これにはふたつのサブケースがあり、その第一は the sun などのように、指示対象の唯一性が保証されているもの、第二は the stars のように類全体を指示したり、As *the child* grows, he learns to be independent. のように類の代表として提示するものとされている。この最後のサブケースは、ふつうは総称的用法と分類されており、Halliday & Hasan も homophoric と呼んで、他のケースとは区別している。

本稿で扱うのは、定名詞句の現場指示的用法の第一の場合、つまり *The train's coming.* のように、特定の状況下で対象が同定できるとされている用法である。本稿では以下では「現場指示的用法」という語を狭義にとって、このケースのみをさすことにする。

1. 現場指示的用法の使用条件

ここでは前節で定義した定名詞句の現場指示的用法が、どのような条件下で用いられるかを詳しく検討する。

池内 (1985) は、定冠詞の用法を (A) 前方照応の用法 (B) 外界照応の用法 (C) 後方照応の用法 (D) 総称的用法の4つに分けている。このうち (B) 外界照応の用法が、本稿でいう「現場指示的用法」に相当する。

その典型的用法は、指示対象が話し手・聞き手両者に見えている場合である。

(3) *Pass me the book.*

しかし、池内は指示対象が必ずしも話し手・聞き手両者に見えている必要はないという。犬がいる隣家のガレージに通じる道を駆け上がって来る人に、次のような発話をするとき、聞き手に犬は見えなくてもよい。

(4) *Don't go in there, chum. The dog will bite you.*

部屋のなかを移動している目の不自由な Harry に、次のように言うときも同様である。

(5) *Harry, mind the table!*

また、聞き手には見えているが、話し手には見えなくてもよいという。刑務所の塀を乗り越えた囚人を捕らえるようにと、塀の向こうにいる聞き手に呼びかける場合である。

(6) *John, catch the jailbird!*

また、家の玄関に次のような張り紙があるとき、犬は話し手にも聞き手にも見えていない。

(7) *Beware of the dog.*

池内は定冠詞の使用条件として、「共有知識集合」の重要性を強調している。the の使用は、その指示対象が話し手と聞き手の共有する知識集合に既に納められており、そのため聞き手は the N によって指示対象を同定できるのである。そして、上にあげた現場指示的用法の場合にも、「話者、聴者を取り巻く直接的発話場面が共有知識集合の役割を果たしている」⁽²⁾としている。

しかし、この分析には重大な問題があると言わざるを得ない。a boy → the boy のような前方照応的用法では、不定名詞句 a boy によって、指示対象は既に談話の中に導入されているので、確かに話し手と聞き手の共有知識集合に既に納められてい

る。また、Pass me *the book*. のように、話し手・聞き手の両方に見えている指示対象は、現場の視界を共有しているという意味でなら、共有知識の条件は成立していると言ってよいかも知れない⁽³⁾。しかし、池内があげる他の例文についてはどうだろうか。目の不自由な Harry に Mind *the table*! と言うとき、聞き手にはテーブルは見えていないのだから、聞き手はそこにテーブルがあるということをまだ知らない。テーブルの存在は、聞き手 Harry の知識集合のなかにはないのである。このような状況で、聞き手は話し手と何を共有していると言えるのだろうか。テーブルを含む発話の現場を共有していると言うことが不可能なのは明らかである。テーブルの存在は Harry の知識集合にはないからである。ではテーブルを含まない現場を共有しているとするならば、聞き手の Harry は現場以外のどのような情報をもとにして the table の指示対象を同定することができるのだろうか。そもそもいわゆる「現場指示的用法」では、指示対象の同定に必要な情報は、発話の現場に求められるのであった。それなのに Harry が現場以外の場所にその情報を求めねばならないとするならば、もはやこれは「現場指示的用法」とは呼べないのではないだろうか。これが本稿の問題提起である。

同様に、玄関の張り紙の Beware of *the dog*. 「猛犬注意」の場合は、その家に犬がいることを知らなくても、この張り紙は有効であり、むしろ知らない人に対する警告として張り出されている。このとき、定名詞句 the dog は一体どの犬を指示していると言えるのだろうか。池内は the の使用条件として、聞き手は共有知識をもとにして、対象を同定 identify することができなければならないとした。Beware of the dog. の張り紙を見た人は、果たして特定の犬を同定することができるのだろうか。

このように考えると、自明に見えた最初の例 Pass me *the book*. についても、「その本が話し手にも聞き手にも見えているから同定できる」という、一般に行われている説明の妥当性がにわかに疑わしくなるのである。

本稿では、このような定名詞句のいわゆる「現場指示的用法」について考察し、次のような主張をする。

- (A) 指示対象が話し手と聞き手に見えているということは、本質的条件ではない。
- (B) それよりも、定名詞句の指示の決定に必要なのは、「値踏みの場」である。
- (C) 現場指示的用法の場合、この「値踏みの場」は共有知識から導出された認知的フレームが発話現場と重ね合わされることで形成される。
- (D) 一般に定名詞句は、値踏みの場を領域とし、外延を値域とする写像関数である。

2. 談話モデルと現場指示

筆者は東郷 (1999) において、談話モデルという考え方を提案した。このモデルには「共有知識領域」「発話状況領域」「言語文脈領域」という3つの指示領域が、心的モデルとして設定されている⁽⁴⁾。指示表現はこのうちどの領域を指示領域とするかによって、その性格を異にする。例えば裸の固有名は、共有知識領域のみをその指示領域とする。また3人称の人称代名詞の指示領域は、言語文脈領域である。ところが、指示形容詞句 this N と定名詞句 the N は、一見するとそのすべてを指示領域とすることができるように見える。

(8) 指示形容詞句

- a. 共有知識領域 *Those French are so touchy.*

- b. 発話状況領域 [指さして] Take *this book*.
- c. 言語文脈領域 He passed me a bucket, but *this bucket* had a whole in it.

(9) 定名詞句

- a. 共有知識領域 *The whale* is a mammal.
- b. 発話状況領域 [指ささずに] Shut *the door*.
- c. 言語文脈領域 He brought me some water, but *the water* was dirty.

東郷 (1999)では、主として言語文脈領域を指示領域とするいわゆる文脈指示の用法に限って、指示形容詞句と定名詞句の指示のメカニズムのちがいを明らかにした。その際に用いた概念は、「直接指示」と「間接指示」⁽⁵⁾、および「発話状況」Context of use と「値踏みの場」Circumstances of evaluation⁽⁶⁾である。本稿では、発話状況領域をその指示領域とする、いわゆる現場指示的用法を取り上げる。

指示形容詞句による現場指示は、指さし行為 (または視線・頭の動きなどそれに代わる行為) を伴い、現場に存在する対象を直接指示する行為である。この場合、定名詞句とは異なり、指示対象は聞き手に見えていなくてはならないとされる⁽⁷⁾。

(10) Don't go in there, chum. *This dog* will bite you.

指示形容詞句に課されているこの制約は、指示形容詞句が直接指示を行なうという理由によるものである。この場合、指示対象の同定は、指さしなどの直接指示行為によって保証される。対象同定に必要な情報は、すべて発話の現場が提供している。

既に前節で述べたように、定名詞句の場合には、対象は目に見えていなくてもよいし、指さしなどの行為を伴わないとされている。このとき、聞き手は対象同定に必要な情報を、どこから得るのだろうか。

このような場合によく指摘されるのは、the N に該当する指示対象が、発話の現場に唯一存在するというケースである。聞き手のいる部屋にドアがひとつしかなければ、次の発話の the door が何をさすかは自明である。これを「唯一性の制約」と呼んでおこう⁽⁸⁾。

(11) Shut *the door*.

仮に部屋にいくつもドアがあっても、開いているドアがひとつしかなければ、(11)の発話は有効である⁽⁹⁾。坂原 (1996)はこの例について、「発話状況で得られる情報と、発話された文が伝える意味の組み合わせから、唯一物の同定が可能になる」と述べている⁽¹⁰⁾。閉じることができるドアはひとつしかないのである。唯一性の制約は守られている。

ところが、次の例はどうだろうか⁽¹¹⁾。

(12) [大きな屋敷の玄関の中で、ドアが4つありすべて閉じている。話し手は外出用の服を着て帽子を被り、手にはスーツケースを持っている]

Open *the door* for me, please.

開くことのできるドアは4つあり、唯一性の制約に違反している。文が伝える情報は「ドアを開けてくれ」という情報のみであり、対象の同定に寄与していない。にもかかわらず、この発話は有効であり、聞き手は迷うことなく、台所や居間に通じる

ドアではなく、外に通じる玄関ドアを開けるだろう⁽¹²⁾。

明らかにここでは、話し手の服装・荷物・態度から聞き手が推測することのできる「外出」というシナリオが働いているのであり、それは発話のもたらす言語的情報ではない。ここで定名詞句の指示を決定しているのは、指示対象が目の前に存在しているというような単純な物理的実在性ではない。もっと複雑な心的構築もしくは心的計算が働いているのである⁽¹³⁾。上の例で仮に「外出というシナリオ」と呼んだこの心的構築は、Kaplan (1989)の言う「値踏み場」に相当すると本稿では考える。

3. 値踏み場

Kaplan (1989)はその直接指示理論の一部として、Context of use と Circumstances of evaluation (以下「値踏み場」)を区別することを提案した。この理論では I, you, he, here などの一群の記号は indexical 「指標詞」と呼ばれていて⁽¹⁴⁾、その指示は Context of use によって決まるとされている⁽¹⁵⁾。Context of use とは、おおまかに言えば、話し手が特定の時点・特定の場所において行なう一回一回の発話行為をさす。例えば I のような代名詞のさすものは、一回ごとに異なる。この指示を決定するのが Context of use である。

一方、値踏み場は、命題の真偽と、命題中で用いられた単称名辞の指示が決定される特定の状況をさす。わかりやすいものとしては、反実仮想 counterfactual などの可能世界があるが、これ以外にも、あるものが取りうる可能な状態、世界の歴史、時間などがあるとされている⁽¹⁶⁾。例をあげよう。

(13) [浮気をした夫を許す友人を見て]

If I were you, I wouldn't forgive *my husband*.

例(13)の話し手は独身女性だとする。この命題の真偽は現実世界 w では決定できない。私があなたである可能世界 w_1 でのみ決定できる。同様に、指示表現 *my husband* の指示対象も、現実世界 w では決定できない。話し手は独身で夫はいないからである。*my husband* は私があなたであり結婚している可能世界 w_1 において、私の夫である人をさす。このように値踏み場は、関数として働く名詞句の内包の入力となり、内包は出力として外延 (=指示対象) を返すのである。言い換えれば、名詞句の内包とは、値踏み場を領域とし、外延を値域とする写像関数であると言うことができる⁽¹⁷⁾。

(14) M^{me} Bovary has blue eyes.

例(14)の命題の真偽も現実世界 w では決めることができない。なぜならこの命題の真偽を確かめるためには、Flaubert の書いた $\langle M^{me} \text{ Bovary} \rangle$ という小説世界のなかで、主人公がどのように描写されているかを確認しなくてはならないからである。このとき小説世界はひとつの値踏み場として働く。

このようなマクロな世界だけでなく、言語文脈が形成するミクロの世界も値踏み場として機能することを東郷 (1999)で示した。

(15) a. Un avion s'est écrasé hier. { **L'avion** / ?**Cet avion** } venait de Miami.

"An airplane crashed yesterday. {The airplane / This airplane} was coming from

Miami.”

b. Un avion s’est écrasé hier. { ?L’**avion** / **Cet avion** } relie habituellement Miami à New York.

“An airplane crashed yesterday. {The airplane / This airplane} links habitually Miami and New York.” (Kleiber 1986)

(15) a. で定名詞句 *l’avion* の方が指示形容詞句 *cet avion* より容認度が高いのは、第一の文と第二の文が同じ過去の世界に属し、値踏みの場を共有しているためである。
(15) b. では逆に指示形容詞句 *cet avion* の方が容認度が高いが、その理由は、第二の文が第一の文とは異なる値踏みの場にたいしてその真偽を判定されるからである⁽¹⁸⁾。

4. 現場指示的用法における値踏みの場

さて定名詞句のいわゆる現場指示的用法に話を戻そう。本稿の主張は、例(12)の *Open the door for me, please.* のような定名詞句の指示を決定するのは、発話の場におけるドアの物理的実在と、聞き手によるその視認ではなく、発話の場において形成された心的構築としての「値踏みの場」であるというものである。後に述べるように、この値踏みの場の形成には、発話の現場に存在する要素だけでなく、話し手による発話 (*Open the door for me, please.*) と、それに加えて共有知識領域をその源とするプロトタイプの知識が発動されている。言い換えると、談話モデルのすべての談話資源が発動されているのであり、その意味で「現場指示的用法」という名称は不適切だと言わねばならない。

Take this book. のような指示形容詞句を用いた現場指示の場合には、発話の場における本の物理的実在と、それを指す指さし行為があれば、指示は有効である。指示対象の同定には、いかなる値踏みの場も関与していない。指示詞は Context of use からの指示だからである。実はそれに加えて、名詞句の内包そのものも本来の関数として機能してはいない。名詞句を除いて *Take this.* でも同じ指示を実現できるからである。

一方、定名詞句の場合には、ふつう言われているように、指示対象が話し手と聞き手の目の前にあり、その存在が現場的に共有されているというだけでは指示は有効ではない。定名詞句は Context of use ではなく、値踏みの場を入力とするので、なんらかの値踏みの場が形成されなくてはならないのである。

Kleiber (1987) は次の例をあげてこの問題を論じている。話し手は Colmar の駅で Strasbourg 行き 8時03分発の列車 Vintimille 号を待っている。まだ列車が到着しないうちは、次の発話では指示形容詞句の方が適切である。

(16) {Ce /?Le} train a toujours du retard.

“{This/ ?The} train is always late.”

ところがホームに列車が入って来ると定名詞句の方が適切になる。

(17) {Le/?Ce} train arrive.

“{The /?This} train arrives (=Here comes the train.)”

Kleiber によれば、この現象は次のように説明される。(16)の発話は、現在の私の置

かかれている「X月X日の8時現在Vintimille号を待っている」という、時間に束縛された値踏み場からはずれた所で、いつも乗る Vintimille 号がよく遅れるという一般論を述べている。このため当該の値踏み場を入力とする定名詞句は不適切になる。一方、(17)の値踏み場は、待っていた列車の到着である。まさにその時点における値踏み場を入力とする定名詞句は、このような事態の直接的報告にふさわしいのである⁽¹⁹⁾。

Kleiber (1986)の次の例を見よう。左右をよく見ないで道路を横断している人につかりそうになっている車がある。この場合は定名詞句がはるかに適切である。

(18) Attention à {la /?cette} voiture !

“Beware of {the/?this} car !”

指示形容詞句が不適切なのは、聞き手は *cette voiture* でさされているのがどの車かを発話場において確認する必要があり、周囲を見回して指示対象を求めることになるからである。これは指示詞が Context of use に依存した指示を行なうためである。聞き手は現場に直接的に指示対象を求めねばならない。このため、「Quelle voiture ?」「どの車？」という問いかけを生じてしまう。

定名詞句が適切なのは、聞き手は発話場に直接に指示対象を求める必要がなく、その場で形成された値踏み場（ここでは「自分が道路を横断しているときに車が迫っているという状況」）を理解するだけで十分だからである。この場合、聞き手は *la voiture* で指示されている対象を、視認によって同定する必要はない。そのため「Quelle voiture ?」「どの車？」という問いかけを生ずることはなく、聞き手は車の視認同定のために振り向くことなく歩道に飛び退けばよいのである。

本稿の冒頭にあげた定名詞句の現場指示的用法とされる例は、同じように説明することができる。

(19) a. Don't go in there, chum. *The dog* will bite you.

b. Harry, mind *the table* !

c. John, catch *the jailbird* !

d. Beware of *the dog*.

例 a. では聞き手にはそこにいる犬が見えていないし、犬がいるということも知らない。例 b. では目の不自由な聞き手には、テーブルが見えない。例 c. では脱走した囚人は塀の向こうにいて話し手に見えない。例 d. は張り紙であり、話し手にも聞き手にも犬は見えていない。

池内(1985)を始めとして、定名詞句の現場指示的用法を論じる場合、指示対象が現場に存在していて、話し手にも聞き手にも見えているという状況を、その本来的用法とする傾向が認められる。上の例のように、話し手、または聞き手、あるいはその両方に指示対象が見えないケースは、むしろマージナルなケースであるかのように論じられることが多い。これは同定可能性 *identifiability* を定名詞句の使用条件とする考え方からは当然の帰結である。現場では対象を視認することが、最も確実な同定だとされるからである。

ところがここで発想を180度逆転する必要がある。定名詞句のいわゆる「現場指示的用法」では、指示対象が視認できることは必要条件ではない。見えていなくてもいいのである。それにかわる必要条件は、指示対象の同定に必要な値踏み場が形

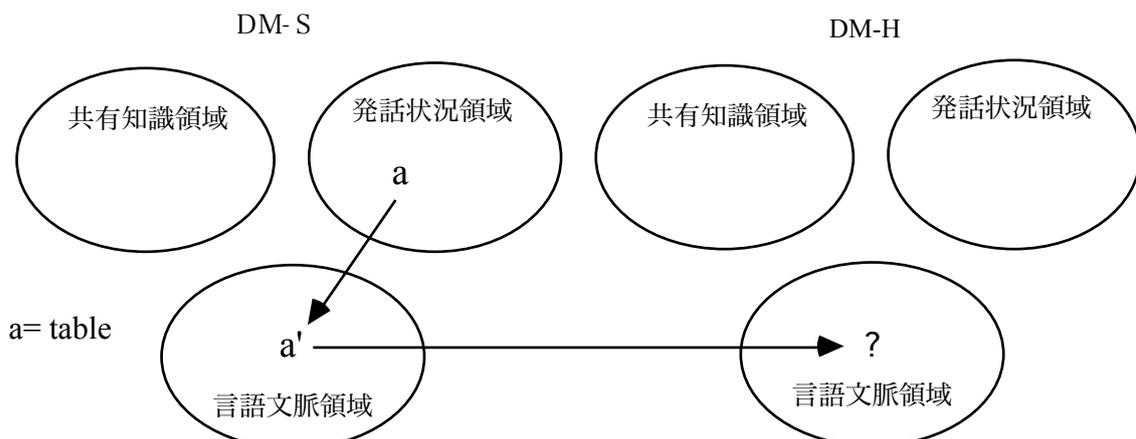
成されていることなのである。二階へ上がる人に *Mind the step.* と言うときには、「聞き手が二階へ上がろうとしている状況」が値踏み場として働く。食卓で *Pass me the salt.* というときは、食事中という場面が値踏み場である。台所で料理をしている人が、かたわらにいる人に *Pass me the salt.* と発話してもよい。このときは話し手が料理を作っている場面が値踏み場である。聞き手に塩が見えていなくても、聞き手は戸棚の中を探すだろう。ところが、同じ場面で *Pass me the key.* という発話は、たとえ流し台のうえに話し手の車のキーが置かれていても、適切な発話としては機能しない。聞き手は *Which key?* と聞き返すだろう。台所の鍵かも知れない。食料戸棚の鍵かも知れない。ここでは指示対象の同定に必要な情報を、「話し手が料理をしている」という値踏み場から得ることができない。視認できることではなく、関与的な値踏み場の形成が重要である所以である。

こう考えるとさらに重大な疑問が浮上する。果たしてこれは本当に「現場指示的用法」なのだろうか。これは正当な疑問である。なぜならば、単純に「目の前にあるものをさす」のが現場指示ならば、これはもはや「現場指示」とは言えないからである。本当の意味での「現場指示」は、指さし行為を伴った *this book* のような指示詞の職分である。現場指示では *Context of use* が働くのである。現場で見えていないものまでさす定名詞句の用法は、もはや単純に「現場指示」と呼んで済ますことはできない。より複雑な値踏み場の心的構築が必要なのである。

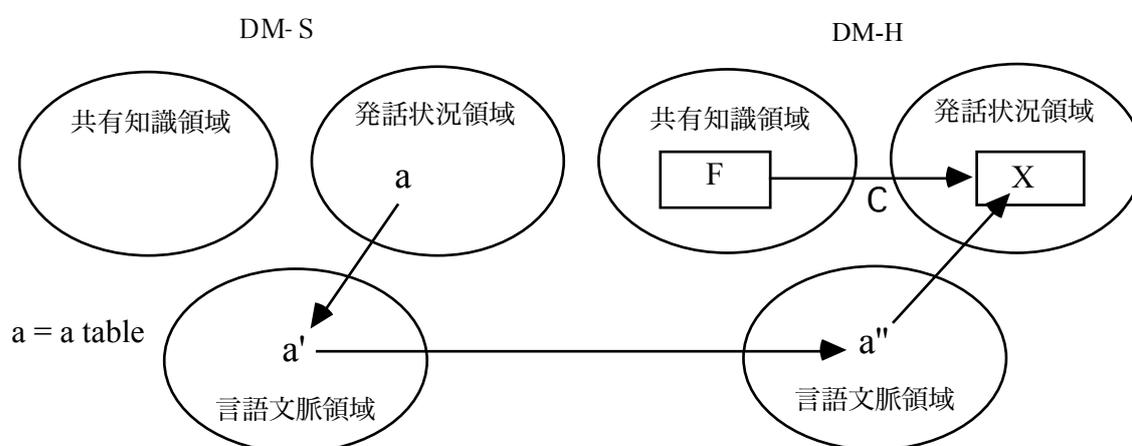
5. Harry, mind the table! の値踏み場

上では料理の場面を出したが、もうひとつ例を考えよう。目の見えない Harry が居間のなかを移動している。このとき *Harry, mind the table!* は適切な発話である。それはなぜだろうか。テーブルは移動の障碍となるという一般的知識と、居間にはテーブルがあるという知識が働いているからである。Harry はテーブルがあると思われるあたりを避けるように慎重に行動するだろう。ところが同じ状況で、*Harry, mind the fire engine!* や、*Harry, mind the mailbox!* は適切な発話とは言えない。ふつう居間のなかには消防自動車や郵便ポストは存在しないからである。この事実は、いわゆる定名詞句の「現場指示的用法」において、「ふつう居間にはテーブルがある」という一般的知識が指示対象の同定に寄与しているということを意味する。談話モデルでは、このような一般的知識は「共有知識領域」に格納され、随時参照されて利用されるとしている。ここで、共有知識領域に格納されている一般的知識が発話の理解に利用されるということを、共有知識領域から発話状況領域にフレームがコピーされると表現しよう。

この事情を図示すると次のようになる。次は始発段階での談話モデル状態である。



DM-S は話し手の談話モデル、DM-Hは聞き手の談話モデルである。談話モデル理論では、言語によるコミュニケーションはDM-S と DM-H の調整過程であると定義される。a は発話状況領域 (=発話の現場の心的表示) に存在するテーブルを表す。このテーブルは話し手だけに見えているので、DM-H にその対応物はない。話し手の Harry, *mind the table!* という発話により、DM-S の言語文脈領域に a の対応物 a' が登録される。聞き手はその発話を聞くことにより、自分の談話モデル DM-H の言語文脈領域に、その対応物を探さなくてはならない⁽²⁰⁾。しかし、聞き手は DM-H になかに a' の対応物を持っていない。Harry にはテーブルが見えていないので、DM-H のどこにもそれに対応するものがないからである。そこで Harry は自分の共有知識領域に格納された談話資源を発動する。



DM-H のなかの四角 F は、共有知識領域に格納されたフレームをあらわす。ここでは「家の居間」のフレームである。このフレームには、舞台がアメリカだとすると、{テーブル、椅子、ソファ、マントルピース、窓、etc.} などの要素がデフォルトで含まれている。Harry は発話の理解のために、このフレーム F を共有知識領域から発話状況領域にコピーする。矢印 C はこのコピーの関係を表す。こうしてコピーされたフレームは Harry がいる現場と重ね合わされる。するとそこには話し手の発話に現れた指示表現 *the table* に相当する要素 X が存在するはずである。この X が a' の対応物であると了解されることで、言語文脈領域の a'' とリンクされ、最終的に発話の理解が完了する⁽²¹⁾。

ここでは共有知識領域からコピーされたフレーム F が Harry のいる発話の場と重ね合わされたものが、発話の理解に必要な「値踏みの場」として機能しているという点を強調しておきたい。

このような状況は、文脈指示における連想照応 *associative anaphora* とよく似ていることに気づくだろう。

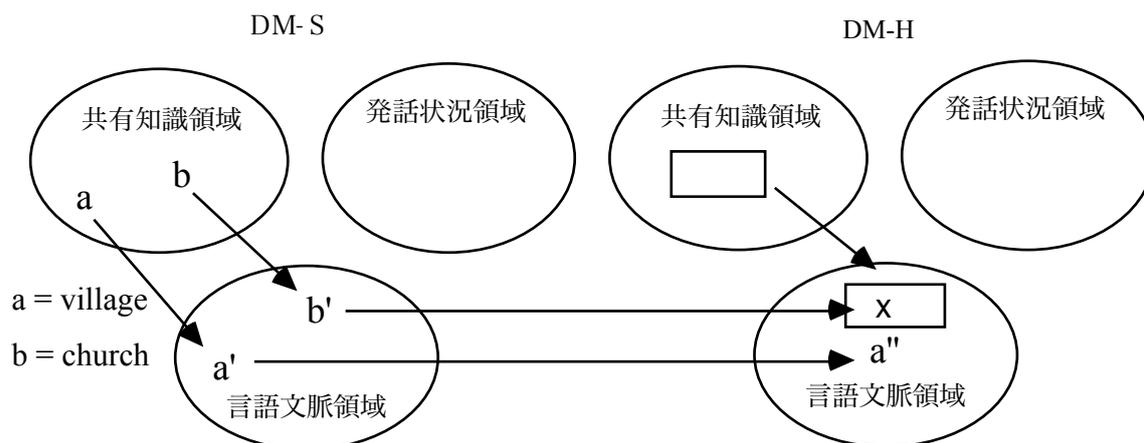
- (20) a. I had to get a taxi from the station. On the way *the driver* told me there was a bus strike.
 b. They've just got in from New York. *The plane* was five hours late.
 c. I've just been to a wedding. *The bride* wore blue.

例a. では a taxi がフレームを開き、そのフレームには *the driver* が含まれている。同様に例b. ではアメリカの長距離移動のフレームには *the plane* が含まれており、例c.

では結婚式には花嫁が不可欠である。このような認知的フレームは文化的・社会的に一般的知識として共有されているとされる⁽²²⁾。連想照応的に用いられた定名詞句がフレームにデフォルトで含まれていないと、うまく働かない。

- (21) a. We arrived at a small village. *The church* was on a hill.
 b. We arrived at a small village. ?*The department* store was crowded.

村のフレームに教会は含まれているが、デパートは含まれていない。この状況は次の図で表現することができる。



話し手は自らの体験に基づいて、共有知識領域に a = village、b = church を保持している。発話された a small village は DM-S の言語文脈領域に a' として登録され、その対応物 a'' が DM-H の言語文脈領域に形成される。次に話し手は the church によって、b' を自分の言語文脈領域に登録する。聞き手は the church が使用されたことにより、自分の談話モデル DM-H にその対応物を探さなくてはならないが、それは存在しない。そこで共有知識領域から村のフレームを言語文脈領域にコピーし、そのなかに含まれた x をその対応物と理解し、b' とリンクする。

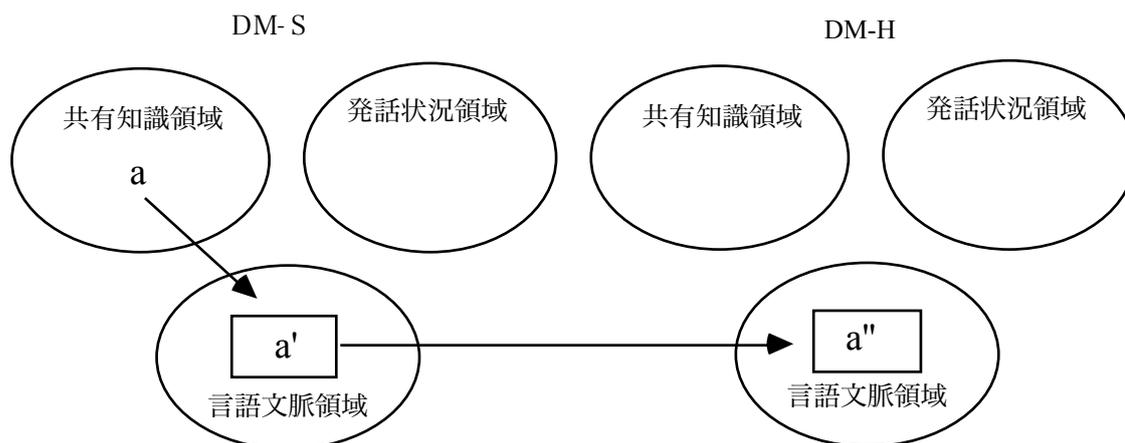
以上から明らかのように、Harry, mind the table! のようないわゆる「現場指示的」定名詞句は、連想照応とよく似たメカニズムによって理解されるのである。ただ、連想照応では共有知識領域のフレームが言語文脈領域にコピーされるが、現場指示的用法では発話状況領域にコピーされるというちがいがあがある。前者ではフレームが言語文脈領域に重ね合わされたものが、定名詞句の指示を決定する値踏み場として働き、後者ではフレームが発話状況に重ね合わされたものが値踏み場として働く。

6. 定名詞句による指示の統一的理解に向けて

以上の分析は、文脈照応用法の定名詞句にも拡張することができる。次はふつうの前方照応的用法である。

- (22) He was working at a lathe the other day. All of a sudden *the lathe* stopped turning.

このような場合、定名詞句 the lathe は先行文脈にある a lathe をさすとされることがあるが、それは正しくない。



話し手の発話 P1 = He was working at a lathe the other day. によって、DM-S の言語文脈領域に a' = lathe が登録される。このとき言語文脈領域に形成されるのは、不定名詞句 a lathe に対応する要素 a' だけではない。「先日彼が旋盤で工作していた」という P1 の命題内容が形成する値踏み場 (図では四角で表してある) もまた言語文脈領域に形成され、a' はそのなかのひとつの要素として登録されるのである。この値踏み場は時点 t_1 (=the other day) をパラメータとして持っている。このとき a' は四角が表している値踏み場と不可分である。この値踏み場もまた、a' とともに聞き手の DM-H の言語文脈領域にコピーされる。したがって、DM-H の a'' は単に a lathe に対応するのではない。これを自然言語で表現すると、“the lathe which he was working at the other day” に対応するのである。

発話 P2 = All of a sudden *the lathe* stopped turning. により、聞き手は the lathe の指示対象を同定しなくてはならないので、自分の DM-H のなかにその対応物をさがす。その対応物は a'' であるが、それは言語文脈領域に形成された値踏み場の中に含まれた a'' である。すなわち、ここでも関数として機能する定名詞句 the lathe の指示の決定には、値踏み場が入力として働くのである。a lathe → the lathe のような文脈照応の外見的単純さが、その本当のメカニズムを隠しているのである。

このように、定名詞句の照応的用法、いわゆる「現場指示的」用法、および連想照応の用法は、その指示の決定に関して同じひとつのメカニズムで統一的に説明することができる。ここで改めて、定名詞句 (の内包) を、値踏み場を領域とし、外延を値域とする写像関数と定義する⁽²³⁾。この定義は上記のすべての定名詞句の用法に当てはまる。ただし、ちがいは入力として働く値踏み場がどの領域で形成されるかである。照応的用法では、値踏み場は言語文脈領域で形成される。連想照応では、共有知識領域から引き出されたフレームが言語文脈領域に重ね合わされることで形成される。そしていわゆる現場指示的用法では、共有知識領域から引き出されたフレームが発話状況に重ね合わされることで形成されるのである⁽²⁴⁾。

7. おわりに

話し手と聞き手の目の前にあるものをさす Pass me *the book*. のような定名詞句は、「現場指示的」用法と呼ばれ、指示対象が視覚的に話し手と聞き手に共有されることが、定冠詞が用いられる理由だとされてきた。Hawkins (1978) はこのような用法を Visible situation use とし、指示対象が見えない Beware of *the dog*. のような用法を Immediate situation use として区別している。

本稿ではこのような区別は根拠のないものであり、問題の用法にとって、指示対象が視覚的に共有されていることは本質的なことではなく、指示対象の同定に用い

られる値踏み場が形成されていることが本質的であることを示した。この意味で「現場指示的」用法という名称は、きわめて誤解を招きやすいものであり、注意が必要なのである。またこのように値踏み場を定名詞句の指示対象決定の入力とすることで、定名詞句の他の用法も統一的に捉えられることを示した。

残された問題は次の点である。Harry, mind the table! という発話によって、目の不自由な Harry は the table の指示対象を本当に同定していると言えるのだろうか。よその家の門に貼ってある Beware of the dog. という張り紙を見て、私たちは the dog がさしている特定の犬を同定すると言えるのだろうか。この問題を考えるには、そもそも指示対象の「同定」identification とは何かという問題をさらに掘り下げる必要がある⁽²⁵⁾。残念ながら本稿の限られた紙幅ではこの問題を考えることができない。別の機会に譲りたい。

【注】

*本研究は、平成12年度文部省科学研究費(基盤研究 (C) 課題番号10610513) の補助を受けて行われた。

- (1) より現代的表現としては坂原 (1996) の次のような指摘がある。「定冠詞句 the N は、要素の同定を要求するが、同定すべき要素がカテゴリーNに属するという情報しか与えない。どのような理由で同定可能かは、言語的には表現されていない。」(p.41)
- (2) 池内 (1985 : 49)
- (3) ただし、指示対象が話し手にも聞き手にも見えているという視界の共有だけでは、現場指示的用法の必要条件を満たさないことは、のちに論じる。
- (4) 談話モデルの詳細については、東郷 (1998)、東郷 (1999)、東郷 (2000)、東郷 (2001) を参照されたい。
- (5) 直接指示と間接指示の概念は、Kripke (1972) による。
- (6) Context of use と Circumstances of evaluation は Kaplan (1989) の用語である。Circumstances of evaluation を「値踏み場」と訳したのは野本 (1979) であり、本稿ではこの訳語を用いる。
- (7) 池内 (1985 : 100)、坂原 (1996 : 47)。
- (8) 唯一性 uniqueness を定冠詞使用の最も重要な条件としたのは Hawkins (1978) である。しかし、本文のすぐ次の例が示すように、唯一性のみ依存する説明では困難な例がある。
- (9) Lyons (1980)、坂原 (1996)、Lyons (1999)。
- (10) 坂原 (1996 : 42)
- (11) Lyons (1999) の例。
- (12) もちろん「外出のためにあけることのできるドア」は唯一である。このように主張して「唯一性の制約」を擁護することはできるが、それは後述する「値踏み場」を認めることにつながり、結局は本稿の主張と同じことになる。
- (13) 高橋 (1956) は、「場面」を客観的に存在する非言語的対象であり、観察の対象となるものとする一方、「場」を主観的・心理学的・生理学的な「意識形態」として、「場面」と「場」を区別する重要性を説いた。
- (14) Kaplan が indexical と呼んでいるのは、Russell が “egocentric particular”、Reichenbach が “token reflexive” と呼んだものであり、言語学では Jakobson が “shifter” と呼んだものに相当すると考えてよい。I/you などの人称代名詞、here/there などの直示的副詞、today/yesterday などのように発話の現在を起点と

する時間表現がこれに含まれる。

- (15) Kaplanの第一原理は次のように定めている (Kaplan 1989 : 492)

Principle 1

The referent of a pure indexical depends on the context, and the referent of a demonstrative depends on the associated demonstration.

- (16) “Let us settle on *circumstances* for possible circumstances of evaluation. By this I mean both actual and counterfactual situations with respect to which it is appropriate to ask for the extensions of a given well-formed expression. A circumstance will usually include a possible state or history of the world, a time, and perhaps other features as well.” (Kaplan 1989 : 502)

- (17) このことを平易に表現すると、the king や the president のような指示表現の指示対象を定めるためには、その表現がどこの国について、いつの時代について用いられたかを考慮しなくてはならないということである。この場合、可能な国、可能な時代の組み合わせが the king の指示が評価される値踏みの場として働く。
- (18) 以上示した反実仮想世界のような可能世界や、現在・過去といった時間が作り出す値踏みの場は、Fauconnierのメンタル・スペース理論におけるスペースに相当する。ではなぜ本稿ではスペースという用語ではなく、値踏みの場という別の用語を用いるかということ、以下に述べる相違点があるからである。

メンタル・スペース理論においても、定名詞句は役割関数と定義される。ただし、その指示を決定するために、役割関数にはそれが含むパラメータの値が付与されると考える。例えば「大統領」は {国} と {時点} のふたつのパラメータを持つ関数で、{国} にフランス、{時点} に2001年の現在という値が付与されるとシラクという外延が得られる。このようにメンタル・スペース理論では、定名詞句の指示はパラメータの値の付与により決定されると考えており、本稿のように値踏みの場（メンタル・スペース理論ではスペースに相当）を入力として決定されるとは考えていない。大統領のようにその役割的性格が明確で、国と時点というパラメータを明示的に設定できるケースでは問題ないが、定名詞句のなかにはパラメータを明示的に設定できないものもあり、その場合は問題が生じる。例えば本文の例 (12) の *Open the door for me, please.* では、何をパラメータとするのだろうか。

もうひとつの相違点は、メンタル・スペース理論では、言語文脈が形成するミクロの構造や、現場指示において形成される場を、特にスペースとは呼んでいない。坂原 (1996)は次の例をあげて指示形容詞が「フレーム」転換の合図となるとしている。

i) I entered a castle. I crossed the hall and went to the stairs. The/?This castle was calm and peaceful.

ii) I entered a castle. I crossed the hall and went to the stairs. ?The/This castle is always calm and peaceful.

この「フレーム」は本稿で言う値踏みの場に相当するのだが、定義なしに用いられている「フレーム」がスペースとどう異なるのかは説明されていない。

- (19) ここでは詳述を避けるが、(16)は個体レベル述語を持つ主題文 (=二重判断) であり、(17)は局面レベル述語を持つ現象文 (=単一判断) であるという違いが、指示表現の選択に大きく関わっている。この問題については、坂原 (1996 : 48)の注2を参照されたい。

- (20) a table ような不定名詞句は、談話モデルのなかの言語文脈領域に、それに相当

する discourse referent を導入する働きがある。一方、the table のような定名詞句は、原則的にすでに談話モデルのどこかの領域に存在している discourse referent を同定することを要求する。a table → the table のような照応的用法なら、discourse referent は言語文脈領域にすでに導入済みである。The whale is a mammal. のような総称用法では、共有知識領域に登録されている種名 kind をさす。本文で問題にしている Harry, mind the table. では、the table で同定できる discourse referent は DM-H のなかにない。

- (21) DM-Sの発話状況領域の a と、DM-Hの発話状況領域の x もまたリンクされるのだが、図が煩雑になるのでこの矢印は省略してある。
- (22) Minsky (1977)。Schank & Abelson (1977)では script と呼ばれている。
- (23) もうひとつの考え方は、Heim (1982)のように定名詞句を変項 variable とする見方である。この変項 x は必ず何らかの値踏みの場 Ex によって束縛されなければならないと考えればよい。Heim (1982)は照応的用法の定名詞句しか視野に入れていないが、これは他の用法にも拡張することが可能である。本文で示したように定名詞句を関数と定義するのがよいか、Heimのように変項と定義するのがよいかという問題は、当面はオープンにしておく。
- (24) *The whale is a mammal.* のような総称用法は、定名詞句の指示を決定する値踏みの場が、言語文脈領域にも発話状況領域にも見いだせないときに、デフォルトで生じる解釈だと考えられる。総称用法にはいろいろな問題があり、本稿では詳しく考察しない。
- (25) 東郷 (2001)はその試みの一環である。

【参考文献】

- Halliday, M.A.K. & R. Hasan (1976) : *Cohesion in English*, London, Longman.
- Hawkins, J. A. (1978) : *Definiteness and Indefiniteness in Reference and Grammaticality*, London, Croom Helm.
- Heim, I. R. (1982) : *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Ph.D.Thesis, University of Massachusetts.
- Kaplan, D. (1989) : “Demonstratives”, J.Almog, J.Perry, H.Wettstein (eds) *Themes from Kaplan*, Oxford, Oxford UP, 481-563.
- Kleiber, G. (1986) : “Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate”, *Langue française* 72, 54-79.
- Kleiber, G. (1987) : “L’énigme du Vintimille ou les déterminants «à quai»”, *Langue française* 75, 107-121.
- Kripke, S.A. (1972) : “Naming and Necessity”, G.Harman & D.Davidson (eds) *Semantics of Natural Language*, Dordrecht, Reidel.
- Lyons, C. (1980) : “The meaning of the English definite article”, J. van der Auwera (ed) *The Semantics of Determiners*, London, Croom Helm.
- Lyons, C. (1999) : *Definiteness*, Cambridge, Cambridge UP.
- Minsky, M. (1977) : “Frame-system theory”, P.N. Johnson-Laird & P.C. Wason (eds) *Thinking. Reading in Cognitive Science*, Cambridge, Cambridge UP, 355-376.
- Shank, R. C. & R.P. Abelson (1977) : “Scripts, plans and knowledge”, P.N. Johnson-Laird & P.C. Wason (eds) *Thinking. Reading in Cognitive Science*, Cambridge, Cambridge UP, 421-432.
- 池内正幸(1985) : 『名詞句の限定表現』 (新英文法選書第6巻) 大修館書店

- 坂原 茂 (1996): 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」 『認知科学』 Vol. 3, No.3, 38-58.
- 高橋太郎 (1956): 「場面と場」、 『国語国文』 (京都大学文学部国語国文学研究室) vol. 25, No.9.
- 東郷雄二 (1998): 「談話モデルと指示」 『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』 文部省科学研究費成果報告書 (基盤研究 (C) 課題番号07610492)
- 東郷雄二 (1999): 「談話モデルと指示 — 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」, 『京都大学総合人間学部紀要』 第6巻, 35-46.
- 東郷雄二 (2000): 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」 『京都大学総合人間学部紀要』 第7巻, 27-46.
- 東郷雄二 (2001): 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」 『フランス語学研究』 第35号
- 野本和幸 (1979): 『意味と世界』 法政大学出版局.